



いま私たちと私たちの社会は、新型コロナウイルスの感染拡大によって大混乱しています。感染の拡大を防ぐため、学校は長期休業を余儀なくされ、会社、商店、工場は活動を一時止めざるをえませんでした。また、航空便は多くが欠航し、国と国の人の移動は長期にわたり滞り、留学生の中には一時帰国したあと日本に再び入国することが困難になった人もいました。このような社会状況について、どのような授業をつくれば、私たちは生徒とともに学ぶことができるのでしょうか。

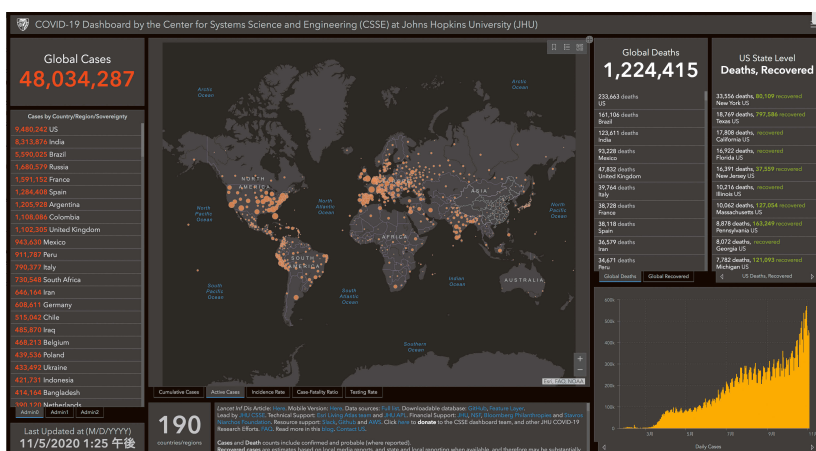
新型コロナ禍で起きたできごととは、地理、歴史というひとつの科目で対応できることではありません。では、総合的な学習の時間で対応できるのでしょうか。1974年にユネスコが国際理解教育について行った勧告では、ほかの地域の理解に止まらず地球規模で取り組む諸課題に向けた教育活動の必要性を強調しています。しかし、今回のようにパンデミックで大混乱している社会について学ぶには、多くの教科目が科目横断的に組織する学びよりも、地理、歴史、公民、生物などいくつかの教科目が、パンデミックという共通の学習課題についてそれぞれ教科目の視点で学びをつくり、それらを持ち寄り相互に補完しあう新しい学びをつくる方が、より迅速に状況の把握と終息への知恵の結集を図る学びにつながるのではないのでしょうか。

このような授業をつくる時、地理ではどのような授業ができるのでしょうか。地理は空間の広がりの中でさまざまな事象やできごとを考えたり表現したりすることができず。例えば、情報を扱うメディア・リテラシーや、図を作ったり読み解いたりするグラフィカシー（図的読解力）を学びながら、地図を活用してわかりやすく感染症について学ぶ授業はできないのでしょうか。

また、新型コロナの感染対策の一つとして手をしっかりと洗うことが求められていますが、世界には「私たちには手を洗うことができるきれいな水がない。」と訴える多くの人々がいます。この課題はSDGsの第6目標「安全な水」に関連しますが、SDGsの17の目標の多くは学校の地理の授業で扱うことができます。さらに、多くの航空便の欠航はビジネスや観光で世界を行き来する人々を止めました。マスクをすることについて人々の感じ方の違いを知ることにもなりました。今回のパンデミックは、このような社会的な活動や地域ごとの文化性のちがいに、地理が今まで以上に光を当てるきっかけになりました。地理はお互いの違いを認め理解する場をつくることができます。今、これらの授業を持ち寄って、ほかの教科と相互に補完しながら、パンデミックについてより深く学ぶ授業づくりの必要性を強く感じています。

(地歴教育・教授学/海陽中等教育学校顧問・特任講師 生田清人)

新型コロナ感染症状況をみるWebサイトの例



世界の感染状況

ジョンズ・ホプキンス大学「COVID-19 Dashboard」

2020年1月から全世界の感染者情報を公開。WHOや各国の保健機関、メディアなどからデータを取得し、1時間ごとに情報や地図を自動更新している。集計データは公開されており、世界の数多くの報道機関で引用されている。



日本の感染状況

NHK特設サイト 新型コロナウイルス

感染状況に関するさまざまなデータを、都道府県ごとに推移グラフで閲覧できる。東京都の感染モニタリング状況や、街の人出状況も毎日更新される。



ニュース報道などによって、情報を得ることは非常に大事である。しかし、その伝えられ方から誤解を生んでしまう報道や、逆に情報の受け手が間違っ情報をつえることもある。新型コロナウイルス感染症（以下、コロナ）はあらゆるニュースで取り上げられているが、正しく伝えられているか、地図の特性を踏まえたうえで理解することが重要になる。ニュースに出てきそうな地図を取り上げ、そこから地図の特徴を読み取り、地図表現の特性をつえることを目的とする。

9

世界の人々が安全な水を得るためには、どのような対策が考えられるだろうか？

授業のねらい

世界各地で罹患者が増大するコロナ感染症であるが、諸外国と比較し日本の罹患者は少ないとされる。日本の少なさには、飛沫感染を防ぐマスク着用率が高い、徹底的に自粛をする人が多い、衛生管理が整っているなどの理由があるとされる。この中でも数値化され、授業で扱いやすい「世界の水環境」を取り上げる。水が十分に得られない、また汚染された水しか得られない国々に対し、日本に暮らす我々ができることを考える授業を提案したい。

導入 世界の国々の水環境を捉える

【5分】

日本では蛇口をひねれば水が得られるが、世界各国がそうではない。病原菌やウイルスの増殖が広がる背景には、不十分な衛生環境があることが知られている。国別の衛生的な水を得られる人々の割合などを示しながら、世界各国水環境の現状に気づかせる。

展開① 安全な水を得られない国の実情を捉える【20分】

水が得られる自然条件としては、一定の降水量があることや地下水に恵まれること、河川から水を得られることなどである。海水の淡水化は高度な技術や大量の電力を必要とし、多くの地域では実施できない。水道が整っていない途上国では、水を汲みに行く場所が遠い場合も考えられる。多くの場合は女性や子どもの仕事であり、水汲みが理由で学校に通えないなどの問題も発生する。図1が示すように、安全な水が得られないことによる死亡率は、アフリカ大陸、南アジアで目立つ。社会条件として、図2の1人当たりGDPと照らし合わせ、生徒に気付くことをあげさせてみよう。衛生環境が悪いことで感染症などに罹患し、それが働けない状況をつくる…という悪循環に陥ることに気付かせたい。また、過去と比べ、ラテンアメリカなど改善している地域に触れることで、ラテンアメリカでは経済が発展した国が多い一方、アフリカは依然として貧しい環境におかれている人々が多いことに着目させたい。

展開② 衛生的な水環境に向けた対策を考える【25分】

安全な水を得ることは日常生活で意識されることは少ないが、確実に行われなければならない。満足に水を得ることができない世界の人々が、衛生的な水を得るために何ができるか考えさせることで、国際協力の視点を取り入れた。例えば、「公衆トイレの設置のために国連から資金を融資する」などの例を出し、何が重要かを理由を含め考察させる。図3のダイヤモンドランキングは、実現可能性の高い手だてを考えるのに有効なアクティビティである。国際協力を扱う場合、教師からの一方的な教授よりも生徒参加型の授業が好ましい。グループやクラスで最適解を考えることで、より深く考察できる。この手法は、先に多くを語らずに入ると、意見の違いからランキングが変わってくることに気付く。お互いの重視するものの違いがわかるのがこの手法の面白いところであり、生徒自ら気づかせたい。

最後にまとめとして、国連が採択したSDGsの目標6「安全な水とトイレを世界中に」に触れて、生徒の視野を広げるとよいだろう。インドのガンジス川は「聖なる川」とされる一方、排泄物も漂うとされる。「神聖」であっても決して衛生的ではない。世界中の人が安全な水を得られることは、感染症の予防だけでなく、貧困対策をはじめとして様々な分野に波及し、だれ一人取り残さない社会の構築に向けて不可欠であることを捉えさせたい。

授業ワークシート

安全な水環境に向けてできることを考える

年 月 日 氏名

問い：水環境は感染症の拡大など、社会にどのような影響を与えているだろうか？

① 感染症を予防するには…何が大切だろうか？

様々な理由があるが、_____の地域を予想しよう。

安全な水が得られない地域とその理由を予想してみよう

地域：アフリカ大陸、南アジア

その理由：雨が降らない地域があること、インフラ整備が滞っている。

② 地域から読み取ってみよう

・1990年と2017年の「世界の安全でない水による死亡率」の図を比較してみよう。

図1

図1 1990年と2017年を比べてみると、衛生的な水が得られるように改善した地域は_____、依然として衛生的な水が得られない地域は_____。

・安全な水と国の豊かさに関係はあるだろうか？

図2 1人の死亡率と図2の1人当たりGDPを比べ、気付いたことを書いてみよう。

気づいた点…

図2 1人当たりGDPと国内総生産

○衛生的な水を得るためには一定の降水量や地下水に恵まれるなどの_____環境、および上下水道が整っているなどの_____環境、両方が整う必要がある

発展途上国の不衛生な水環境を改善していくために、できることを考えよう

途上国にとってどのような国際協力が望ましいのだろうか。実際の支援は、相手国の国勢の状況や発展の段階、また緊急か、短期的か長期的かによっても変わってくる。

水環境改善への支援方法を示したA-Jのカードについて、優先順位が高いものと思われる順に、ダイヤモンド型に並べてみよう。

図3

・支援の優先順位を考える際に、重要と考えたポイントは…

・ほかの人や班の考えを聞いてみて感じたことは…

SDGs（持続可能な開発目標）は、2015年に_____で採択された、2030年までの17の国際目標で「_____」社会を作ることが掲げられている。

SDGs 目標6「安全な水とトイレを世界中に」

感染症と水環境 ダイヤモンドランキング 選択カード

「発展途上国の不衛生な水環境を改善していくためにできることは？」

A 公衆トイレを設置するために国連から資金を融資する	B 地下水をくみ上げる技術を開発する	C 海水の淡水化に向け共同開発を行う
D 汚染された水を浄水化する施設をつくる	E 節水するように教育する	F 河川や井戸水、地下水など水を衛生的に保つよう取り組みを強化する
G 降水量の多い地域から水を運ぶ	H 水を使わなくてもよいようウェットティッシュなどの物資を送る	I 各家庭に浄水器を送る
J その他（自分の考え）		

感染症の広がりや観光業は どのように関係しているのだろうか？

授業のねらい

2020年10月末、日本では累計10万人を超えるコロナ感染者を確認した。同年11月半ばには、世界で第4番目に感染者数が多く、欧州最大の感染者が確認されたフランスでは累計200万人を超える感染者を確認した。とりわけフランスは世界最大の観光大国でもある。授業を通じて、感染症と観光業の在り方を再考することを目的とする。

導入 世界での感染拡大を捉える

【5分】

ジョンズ・ホプキンス大学のWebページを活用して、世界のコロナウィルス感染症拡大の現状を、数値、地図表現、時間的な経過に伴う変容などから捉える。日本国内については、さまざまな地図表現で日々刻々と変化する感染者数の拡大を知ることができる。

展開① 日本の感染状況を地図や統計で捉える

【15分】

図1の2020年11月前半の新規感染者数を表わした主題図で、都市圏と観光地（北海道・沖縄県）の感染者の割合が増えていることに着目する。北海道は道内感染者の4分の3が札幌市内の感染者であり、札幌市は日本でも5番目に大きな市域人口を誇る都市であるとともに、北海道を代表する観光地でもある。そして、第3次産業が8割以上を占める沖縄県（2015年度）の10万人当たり新規感染者数が多いことに言及する。さらに、図2の時間軸の情報を入れて確認する。全国の感染者数の推移と東京都のものは、ほぼ同一の傾向を示すが、沖縄県は7月の下旬から8月の後半にかけてピークがあり、北海道は10月以降に急増していることを確認する。政府の方針で、7月22日から東京発着を除外した「GoToトラベル事業」が導入され、10月1日には東京発着を対象とした「GoToトラベル事業」が拡充したことを時間軸上で可視化する。感染拡大の背景にはさまざまな要因が考えられるものの、観光による人の移動も一因となることを理解する。

展開② 日本と観光大国フランスを比較する

【20分】

フランスは世界最大のインバウンド受入国でもあり、バカンスの時期にはCfb気候（夏季曇天）の北部から、Cs気候（夏季青天）・H気候（夏季冷涼）の南部（地中海沿岸・アルプス周辺）への国内旅行も活発である。図3の1週間10万人当たりの新規感染者数も、都市部に多いことに加えて、北部より南部の方が多いことが地図から確認できる。また、図4に示したように、フランスのバカンスシーズンは7～8月の2か月または10月後半2週間の時期であり、感染者数の推移を確認すると夏以降に再び感染者数が増加していることが確認できる。ここでは、教科書的な事項と紐づけて、フランス国内の観光業の基本を地図や統計から確認するとともに、フランスのインバウンドの6割がEU域内から陸続きで入国しており、国内外出禁止である期間でもEU域内の国境は開放されている事情を、UNWTOのWebページを通じて確認をするとさらに発展的である。

まとめ 日本の持続可能な観光を提案する

【10分】

2020年4～7月、インバウンド99.9%減を経験している日本に視点を戻して、「withコロナ社会で通用する持続可能な観光」について提案させる。感染症対策、マイクロツーリズム、VRトラベル、オンラインツアー、地産地消、足元の資源開発、特産品の発送など、さまざまな視点から観光を考察し、意見交換ができると良い。さらに、SDGsの目標と関連させて発展的に考察させることもできる。

授業ワークシート

日本とフランスを例に観光業への影響と対策を考える

① 図1の都市圏別の感染者数を表わした主題図で、都市圏と観光地（北海道・沖縄県）の感染者の割合が増えていることに着目する。北海道は道内感染者の4分の3が札幌市内の感染者であり、札幌市は日本でも5番目に大きな市域人口を誇る都市であるとともに、北海道を代表する観光地でもある。そして、第3次産業が8割以上を占める沖縄県（2015年度）の10万人当たり新規感染者数が多いことに言及する。さらに、図2の時間軸の情報を入れて確認する。全国の感染者数の推移と東京都のものは、ほぼ同一の傾向を示すが、沖縄県は7月の下旬から8月の後半にかけてピークがあり、北海道は10月以降に急増していることを確認する。政府の方針で、7月22日から東京発着を除外した「GoToトラベル事業」が導入され、10月1日には東京発着を対象とした「GoToトラベル事業」が拡充したことを時間軸上で可視化する。感染拡大の背景にはさまざまな要因が考えられるものの、観光による人の移動も一因となることを理解する。

② 次にフランスの新規感染者数の推移と新規感染者数の推移を確認し、気づいたことをまとめてみよう。

③ 図3のフランス感染発生地域の「警戒ゾーン」以上の地域の分布はどのような特徴があるだろうか？ 図4とも関連させて考えよう。

④ 図5のフランスのバカンスシーズンの時期を確認し、感染者数の推移を確認すると夏以降に再び感染者数が増加していることが確認できる。ここでは、教科書的な事項と紐づけて、フランス国内の観光業の基本を地図や統計から確認するとともに、フランスのインバウンドの6割がEU域内から陸続きで入国しており、国内外出禁止である期間でもEU域内の国境は開放されている事情を、UNWTOのWebページを通じて確認をするとさらに発展的である。

③ フランスは世界最大のインバウンド受け入れ大国であり、日本も観光立国を目指している。国連世界観光機関（UNWTO）のWebページを参照して、図5～7から日本とフランスの観光を比較してみよう。

④ 図6と図7の日本とフランスの観光業の収入の推移から、気づいたことをまとめてみよう。

★フランスは12月現在EU域内に対して国境開放中であり、日本は4～7月インバウンド99.9%減を経験した。

④ 観光に注目しながら、日本とフランスの共通点と差異を確認しよう。

Q5：観光に着目した日本とフランスの共通点は何だろうか？

Q6：観光に着目した日本とフランスの相違点は何だろうか？

Q7：感染の拡大の背景にはさまざまな要因が考えられるものの、観光による人の移動も一因となる点に着目して、観光大国・観光立国としての日本とフランスの今後の社会状況を予測してみよう。

⑤ 持続可能な観光のあり方を提案してみよう。

Q8：日本におけるwithコロナ社会での持続可能な観光とはどのようなものだろうか？